

「偏屈な」清教徒に学ぶ寛容

マーサ・ヌスパウム

「良心の自由」

アメリカの宗教的平等の伝統

河野哲也監訳、慶応義塾大学出版会、5720円



コロナ禍で、人々が余裕を失い、声高な「正義漢」が増えていくと感じます。「自粛警察」にしても、マスクをすればかしくないにしても。少しでもコンコンせきをするとい目で見られる。不寛容な社会になっていると感じます。キリスト教やイスラム教は一神教だから不寛容で、日本人は多神教なので寛容だ、というのどかな自己認識も、不寛

はびこる不寛容

容な排斥論の高まりで揺らぎつつあります。

社会が不寛容になっている時だから、『良心の自由』を挙げたい。著者のマーサ・ヌスパウムは、メイフラワー号に遡る正統派ピューリタンの家に生まれ、米国で伝統的に上流階級の教派とされる英国教会の信徒として育った、哲学・法学の研究者です。ユダヤ人と結婚してユダヤ教に改宗し、差別する側とされる側との両側に立った経験を持っています。

彼女が本書で注目する人物

が、ロジャー・ウィリアムズです。日本では寛容論と言えば、英国の哲学者ジョン・ロックの名が挙がりますが、ウィリアムズはロックより半世紀も前に、はるかに進んだ寛容論を唱えました。著作はロンドンで少数しか出版されず、内容も体制を厳しく批判するものだったこともあってほとんど残っていないため、米国でも20世紀までは埋もれた存在でした。

1630年にアメリカへ旅立ったウィリアムズは当時の常識に逆らい、「英国王が入植者にアメリカの土地を与えないのは不法だ。土地は先住民のものだから、彼らから正当

今月の読書委員

森本 あんり

さん



の方がよほど正しくキリスト教的だ」とも論じています。

万民にある良心

ヌスパウムが評価するのは、「良心」こそ人間の尊厳と平等の根拠だと、ウィリアムズが見たことです。彼は良心は、ユダヤ人にもトルコ人にも、カトリックにも異教徒にもある一との言葉を残し、筋金入りのピューリタンであるにもかかわらず、どんな信仰の人でも無信仰の人でも平等な市民権を持つ社会を建設しました。ヌスパウムは、ウィリアムズが唱えた良心の

自由や政教分離を「アメリカ的伝統」と呼びました。変わりの者で、偏屈で、不寛容の塊のような男が、新しい寛容を生んだのです。評価しないけれど受け入れられる、嫌いだけれど共存する、というウィリアムズの態度。これこそ「寛容」の本義です。自分からみて誤っていることを容認するのが寛容であり、喜んで受け入れられるものは、そもそも寛容の対象ではありません。

このよつな寛容理解は、現代人には評判がよくありません。いかにとも恩着せがまし、「上から目線」に聞こえるからです。互いが同じ地平に立ち、違いを尊重して受け入れ合つことこそ大切だ、と言われます。自分の同類や仲間だけで徒党を組むならそれも可能でしょう。

違い認めて礼節

しかし、現代の問いは、そんなに生やさしい違いではありません。とても受け入れられない深刻な違いに直面した時にどうするか。それでも意見の違いを認めた上でなお、お互いへの礼節をもって社会生活が営める国であってほしい。昨今のヘイトスピーチのように、対話する心構えもなくた言ひ放つだけではない。今後国内でも増えてくるイスラムなどの宗教もそうだし、夫婦別姓、性的少数者の問題などを巡ってもそう。コロナ禍は、寛容と不寛容の理解を再構築する好機と言えます。(聞き手 清岡史)



だれかのともしひ

写真・長島有里枝